

飛鳥川淵ふちにもあらぬわが宿も瀬にかはりゆくものにぞありける

伊勢

『古今和歌集』「雑歌下」の一首。

「飛鳥川ではないからわが家は淵にもならないが、瀬に変わりゆくものであったよ」という。はて、いったいなんのことですか？

本歌は、同じく『古今集』雑の一首。

世の中はなにか常つねなる飛鳥川昨日きのふの淵ふちぞ今日けふは瀬せになる

読人しらす

「この世には、なにか常なるもの不変なるものがあるだろうか。飛鳥川の昨日の深い淵が、今日は浅い瀬に変わる。そのように明日の保証などはないのだ」。昨日、今日、明日を詠み込み、流れ去る時とともに、この世のすべてが無常であることを表現した歌。この一首により、「飛鳥川」は無常の歌枕となった。

さて、もとの歌にもどると、詞書には「家を売ってよめ



る」。そして、「淵フチ」と「扶持フチ」(助け)、「瀬セニ」と「銭ゼニ」が掛詞になっている。

すなわち、「飛鳥川じゃないからわが家は助けにもならなかったけれど、売ったらお金に変わったわ」。まあ、こんな感じの歌であるらしい。「扶持」はともかく「銭」は強引じゃないの、と思わなくもないが、清音と濁音をはっきり区別する現代とちがいで、『古今集』のなかには、清濁の異なる二語を掛ける例はしばしば見られる。

平安貴族にも、ときに家を売却するなどの経済事情があったことは察せられるが、まさか「銭」の歌があるとは。

伊勢は、宇多天皇の皇后温子おんしに仕え、のちには天皇の寵を得て皇子をもうけた(皇子は早世)。掛詞や縁語などのレトリックに長けた、『古今集』の代表的な女流歌人である。

「銭」というきわめて卑属な語を、大胆に掛詞のなかに隠し、しかも本歌の無常感をひびかせるあたり、さすがというほかはない。「八代集」(『古今集』から『新古今集』までの勅撰和歌集)のなかで、「銭」の用例はこの一首のみ。あつばれなチャレンジ精神。(小島ゆかり)